

[連載] 私と建築 vol.92

趣味としての私の建築

text=神田 順 客員教授



生時代には、構造設計をやるつもりでいた。短い期間ではあつたが、竹中工務店に就職していくつかの建物の構造設計を経験させてもらった。1980年からは、東京大学で荷重論と信頼性設計についての講義を長く担当した。自分では構造安全論を大きなテーマにおいて、研究・教育に携わってきた専門家のつもりである。

したがって自宅の設計は、言い訳のようになるが、趣味としての建築ということになる。100分の1の平面から立面や模型、パースまでの基本設計を行い、実施設計は友人に依頼したのもディテールの選択肢が広がり楽しめた。

父が1983年に逝き、母と住むことになり、マンションから自分の育った家に子供3人を連れて戻った。父の残した家は、戦後すぐにつくられた金融公庫融資制度第1号のモダンな木造2階建てである。土木の技術者であったが、設計には随分と心配りがされていた。それでもさすがに、風呂や台所は使いにくく、まずその部分のみを改築した。庭を少し削り、6人で食事のできる丸テーブルのために食堂を円型にした。それに風呂と台所を合わせて前方後円平面の陸屋根コンクリートブロック造の楽しい空間を生み出すことができた。地下には戦時の防空壕があって、それをまたぐために、べた基礎と屋根がコンクリートスラブの堅固な箱となっている。



東馬込の家（1992年5月竣工）スキップフロアになっている。私道には花壇のみで塀なしとした。

下の子が小学校に上がり、1年間アメリカで家族5人の生活を経験し、子供たちにそれぞれ部屋を与えたいと残りの部分も建て直すことになった。アメリカでの生活の影響もあって、地下室を設け、屋上はプールのスキップフロアの家というような夢を絵にすると、想定予算の倍以上となり、RC壁式構造を考えていたのを、地下・半地下のみRCで他は木造にした。部屋の構成は、もともとの住まいをほぼ踏襲した形であるが、半地下をガレージにして、屋上は木造でも陸屋根で外に出られるようにした。これは、結構雨漏りを呼ぶこととなったものの、今も屋上で花見をするなど、無理して良かったとの想いはある。

1947年、岐阜県生まれ。1970年、東京大学工学部建築学科卒業。修士課程修了後、竹中工務店にて構造設計業務に従事。1979年、エディンバラ大学PhD取得。1980年、東京大学工学部助教授。同教授を経て、2012年、同大学新領域創成科学研究科教授を定年退職。2003年より建築基本法制定準備会会長。2012年、日本大学理工学部特任教授。2012年、東京大学名誉教授。

大学が新しいキャンパスを柏に展開した際に、歩いて通える土地を探した。これもアメリカの大学での教員の住まいの影響があったかもしれない。50坪の土地に、45°の切妻で建築面積13坪の屋根裏付きのひとり住まい用である。南側に40坪を借りて庭にすることができて、これまた快適な空間が生まれた。この家は、今は、週に1、2度出かけて庭で気持ち良い時を過ごす形で使っている。しばらくして気になったのが、継手金物である。せっかく梁や柱が組まれているのに、なんとかならないものかと思った。



「流山市青田の家」（2002年8月竣工）手前は空き地（市街化調整区域で建築不可）

大学の定年を迎える1年前に東日本大震災が起きた。そして、釜石市の唐丹という漁村集落の復興に関わることになった。構造の専門家の枠を超えて、建築まちづくりを手探りで良いからできないかと仲間に呼びかけて、活動拠点の家を建てる機会を持つことができた。ひとりですることではないからと、株式会社組織にして株主を募り、会社の事務所兼住宅用の家を、伝統木造で、唐丹湾を見下ろす小白浜の60坪の敷地に、建築面積19坪の総2階建てを2017年9月に竣工することができた。現地の杉を使った木の香りのする家である。山形県鶴岡の棟梁劔持猛雄氏の手で刻んだ仕口・継手を眺めるだけでも心がはずむ。

現在のところ3つの家をお守りしている。いずれが自分の終の棲家になるのかと思うときがある。眠り、食べ、友と語る空間がそれぞれに異なる構成になっているが、建築を考えることが生きることを考えることと少しづつ思えるようになってきた。

駿



「釜石市唐丹町小白浜の潮見第」（2017年9月竣工）まちづくりの拠点としてスタート